

---

# BATTLE ROYALE The Third Battle

吐露非狩古鬱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BATTLE ROYALE The Third Battle

### 【Nコード】

N5342F

### 【作者名】

吐露非狩古鬱

### 【あらすじ】

BR 『BATTLE ROYALE』。第二回大会のそれは史上初にして最悪の悪夢を見せた。(更新はもう少し待って下さい…)

## B R 第二回大会

B R

それは

「新世紀教育改革法」の名の下に実行される超法規的実験、そして復権。

『大人』から『子供』に対して、その失われた権威を再び取り戻すためにそれは施行された。

その名を

「BATTLE ROYALE」と呼んだ。

「私達は、殺し合いをする。」

施行から4年後の第二回大会。

その

「ゲーム」は、優勝者が誕生しない最初の例だった。

第零回大会。

対象者の逃亡及び反乱の防止と殺戮強制の為に装着された首輪、『試作オガサワラ一号』は総重量の関係で対象者が首を骨折する事故が発生。

今回の第二回大会。小型軽量化された『インパール七号』。それはB R史上最悪の悪夢をもたらした

## B R 第二回大会（後書き）

この物語は基本的にBATTLE ROYALE公式設定に基づき執筆しています。

第二回大会の対象者全員死亡のエピソードや首輪の件も全て公式設定です。

今回は自分なりに好き勝手に脚色してみました。

お楽しみ頂けたら幸いです。

## バトルグラウンド

君達は選ばれた

決して逃げられない

この3日間で

たった一人の優勝者が決まるまで

それは死と絶望の宣告だった

4年前に一部鷹派議員でスピード可決され、「新世紀教育改革法」として世間を揺るがし、翌年4月に施行された、BR法。

年に一度、全国4万3000クラスの中から1クラスを選抜し対象者を隔離、優勝者を決定させる。

対外的には国防上必要な戦闘実験として、実際は『強い大人』の象徴として。

私達は不安の修学旅行を向かえ、そしてバスの中でそれは訪れた。意識が無くなっていく。薄れ行く感覚の向こうにガスマスクを着けた運転手が居る。

そのとき自覚した。

私達は選ばれた。

ただそれが嘘であって欲しいと願いながら、私、三嶋 美雪は眠った。

彼は解っていた。選ばれることが。  
だから眠っていた。来るべき闘いに向かえる為に。

バスは着実にバトルグラウンドに戻りつつあった

混沌とした意識。雑踏。私達は確かに枷をはめられ、息苦しさの中  
不規則な振動に揺られた。

おもむろに目を醒ます。暗い。

解るのはとにかく頭に響く爆音。

解る。ヘリコプターだ。目が慣れると丸い窓から遠い夜景が見える。  
そしてもう一つ。

首に感じる冷たいモノ。その冷たさは首を一周し、喉を閉じ込める。  
私だけじゃない、皆付けられている。

首輪だ。

進行方向に向かって後ろ。もう一人、目を醒ましている。

男子7番 九条 宰。ぼんやりと窓の外を見つめている。まるで戻  
れない場所を見るように

不意に電気が着いた。眩しさが瞼を突く。張りのある凜とした怒声  
が響き渡る。

「起きろ!!!」

「起床おー!!!」

前方には迷彩服を着た軍人が一人と、両脇にはマシンガンを抱える  
兵士が並んでいる。

隣にいた女子2番 飯田 小夜子が悲鳴を上げる。すかさず士官は  
ピストルを出してこちらに向ける。

「静かにしろ」

恐ろしく冷たい声で言う。

「じきに到着する」

ヘリの両横には二人乗りの攻撃ヘリ。

「コブラ……！」

男子10番 志摩 則正は呟いた。

軍事に興味があつてクラスでも有名な、軍事オタク。

ヘリが暗い街中へ降下していく。一つだけ明かりが点いたビルは周りを明るく照らしている。

「……街なのに……明かりが……」

その瞬間士官から再び怒声が飛ぶ。

「私語をするなああ……！！！」

周りの兵士が一斉に銃を向ける。「間もなく着陸だ！ハッチが開き次第速やかに降りろ！」

ヘリポートが近付いている。

皆何が起こっているのか混乱している。

「何なんだよ！」

「何処よここ！？」

「首輪……！？」

「誰だよ……」

「おい……まさか」

『教師』は慌ただしい喧騒の中、ヘリの爆音を聞き立ち上がった。

この後『生徒』がやってくる。

「さて……授業ですね……」

ヘリはビルの屋上に着き、後部ハッチが開く。四方八方から兵士と銃口が追い回してくる。「降りろ……！！」

「さっさと中に入れ！」

「もたもたするな……！！」

後ろから威嚇発砲の轟音。薬莖が足元に転がる。  
上空からはコブラが狙撃用意している。

「美雪！」

駆けて来たのは女子13番 名律 倉子。

「どういうこと!?!」

私に聞かれても

「分かんない……」

男子7番 九条 宰はその時を確信した。あのサイトを見付けたのは1年前。

「BR登録フォーム」

半年間、それはただの『お気に入り』だった。あの日が来るまで

そう、この3年B組に未練など、無い。

私達は背中を圧されて『教室』に入った。窓には硬そうな金網が張られている。

その前には同じく兵士。倍の数。

前方の黒板と教卓。一人の男が無表情で立っている。

隣に立つ三人の士官はヒステリックに叫ぶ。一人は女だ。

「着席イー!!!」

「着せーき!!!」

「着席!!!」

椅子なんか無い。教室としての要素は黒板と教卓くらいだ。

「静まれエーーーー!!!」

女の士官がピストルを撃つ。

一瞬の悲鳴の後、教室が静まり返る。

教卓の前の男は満足したように微笑む。縁無し眼鏡を軽く押さえ  
た。

「解っていると思うが」



「分かんねえよ!!」

「静かにしたまえ。殺されたいのか？」

脇の兵士を指差す。

「……………」

「…結構。君達は選ばれた。ゲームに  
皆黙っている。」

自分達の考えが杞憂であると願って。だが。

「えーっと…新世紀教育改革法。皆知ってるよね？」

男は黒板に『BR』と殴り書きしながら、

「新世紀の始め、飽和した経済で、日本は大不況に陥りました。我々オトナの威厳は失われ、貴様たちコドモの横行が激しさを増す

」

穏やかに言った。

「君達のような駄目少年少女に対して世の大人たちは何もできません。ですから!!」

恍惚とした表情で続けた。

「われわれは君達を粛清します…このゲームに人権はありません！逃げられません！助けも来ません！それが今の腐った世の中には必要なんです…」

「だから、この3日間、たった一人の優勝者が決まるまで  
その先は誰もが知っていて。」

「ちよつと殺し合いをしてもらいます  
」

そして誰の予想も違わなかった。

「ルールは簡単です。この電磁フェンスで封鎖された都市エリア内で、3日の間殺し合って下さい」

「冗談じゃねえ!!」

叫んだのは男子14番 手塚 湊。喧嘩っ早い駄目不良。

「何考えてんだよ！何で俺達なんだよ！？」

「厳正なる抽選の結果です。恣意的なことではありません」

恣意なんて言葉は湊には判らなかつたようだ。一瞬黙って兵士に銃を向けられ下がった。

「あ、申し遅れました。私は惣定 市司そうじょうじです。今回のバトルロワイアル担当教官に選ばれました」

隣の士官3人組の内、中年の男が鼻で笑う。教師は特に気にせず話を続けた。

「先ほど申したようにこの都市は隔離されています。もしフェンスを破壊しようとした場合、いま皆が付けている『首輪』が作動します」

皆首輪に手を触れる。外れないと知りながらも思わず引きちぎろうとする。

「止めとけ、外れませんよ。その首輪『インパール7号』は今回の大会から使用される新型です。その首輪は皆さんの生態データを常にココに送り、君たちを監視します。先ほど言った不審行動をとったり、いま皆がやっているように無理に外そうとすると」

私にはその先が理解できた気がした。

「警告音のち爆発します」

首輪に触れていた人が全員手を放す。その表情はまさに汚らわしいといった顔だった。

九条は総て分かっていたし、首輪の名称、ゲームルールその総てを暗記していた。

この説明が待っていることも分かっていたが、非常にまどろっこしくてイライラした。ウダウダと五月蠅い奴らだ。

(早く…早く生まれ……)

「ああ。君達の保護者の方々には連絡済みです。わざわざ家まで

行って伝えたんだぞー感謝してほしい。ちなみにピーピー言って逆らったご両親方は撃ち殺しました」

「！！！！」

空気が一瞬で張り詰めた。まさか

「残念ながら生き残って家に帰ってもご両親が居ない生徒を発表しておきまーす……」

教師は事務的に言い述べた。言い方に迷いや罪悪感なんてものは微塵も無い。それが職務といった感じた。

「男子11番 瀬藤 數毅君」

數毅は立ち上がった。悲しみと怒りの形相で怒鳴る。

「オイ……待てよ、いい加減にしろよ！！何でこんなことすんだよ！！！」

「ああ……君のお父様は反BR活動に熱心でしたね……たしか1年前に暴動の際、殺されたと……」

手元の書類に書いてあるのか、數毅の方を一切見ずに言った。それに私たちも知らなかった、というように數毅を見た。本当にいつキレてもおかしくないようだった。周りの兵士も見えていない。

「殺したのかよ……………！？」

教師市司は向きなおり眼鏡を光らせる。

「はい」

突如數毅は走り出す。市司までの数メートルが短く感じるほど速い。皆が道をあけ、市司と數毅の間で視線を左右させる。

「殺してやる！殺してやる！！殺してやる！！！」

「……………親子揃って思想に問題アリ……………」

やれやれというように市司は自分の腰の後ろに手を伸ばす。市司の眼が突然鋭く氷のようになる。その手に握られていたのは、巨大なマグナム銃

「雉も鳴かずに撃たれまいに」

マグナムが威嚇ではなく真っ直ぐ數毅の方向に火を噴く。數毅の頭は私達の方から見てスイカのように弾け飛んだ。赤い霧の中、白い

モノが吹き飛んで舞った。

それに呼応するかのようにな数殺の身体が後ろへ倒れる。倒れたとき再び頭が割れる音がする。

残ったのはマグナムの煙と残音。それと血だまりの中の変わり果てた死体。

仰向けの死体は顔が泥のように原形をとどめておらず、眼玉が透明な液体を吐き出している。

後ろ男子が吐いたようだ。嗚咽の声と臭いが伝わる。

「失礼。　うるさかったので射殺しました……………」  
殺したことより音が大きいことに謝っている。

本当にこの男は殺しを何とも思っていない。ある意味再確認だった

男子11番 瀬藤 数殺 死亡 【残り41人】

## 二人目

一人死んだ

その事実は残った41人の胸に重くのしかかる。

そんなことを一切気にせずに惣定は説明を続けた。

「ご両親が亡くなられたのは彼だけです、さてルールですが…」  
その言葉を待っていたように扉が開く。

出てきたのは大きな棚。キャスターで運ばれて来たそれにはデイバッグを満載している。

「ここを出る際、皆さんにはこのバッグを持って、街に放たれます」  
「中身は、3日間分の食糧、水、地図とコンパス。懐中電灯、時計。それと武器です」

具体的に殺し合いがどんなものか想像しづらかったのだが、まさか武器があるとは。

「武器は皆違いますが、ランダム性を出す為です」

「さて禁止エリアですが……」

惣定は地図を出した。いびつな形に区切られ、隔離された街は幾つもの四角いエリアに分けられている。

「実は今回のBRも孤島の予定だったんですけどね、いい場所が確保出来ませんでした…」

地図を瘦せぎすの若い士官に持たせる。

「街は、9×8の内63のエリアに分かれ、このビルは北西に位置します。この辺と南側は住宅街ですね」

「東はビル街。南側に川がありますが、川沿いに逃げても首輪が爆発します」

惣定が向き直り言った。

「エリアは2時間毎に更新され、禁止エリアが増えていきます。もしそのエリアに残っていた場合も首輪が爆発します」

予想通りだった。(もちろん九条は知っている)

「ちなみに、24時間死亡者が出ない場合も全員首輪を爆破します  
…ですから注意して下さいね……」

士官は地図を置いてから下がった。惣定は書類を置いて私達を一瞥する。

「何か質問は？」

「はい…」

一人手を挙げた。

男子3番 石間 涼だ。

「3日間優勝者が決まらない時は…」

「全員死にます」

即答された。涼は床に崩れるように座った。

「…ちなみに生き残った人は生涯の生活保証がされます！だから皆  
頑張ってください！」

そう告げて、士官に目配せした。

「では！出発する！名前を呼ばれたらバッグを受け取りエレベータ  
ーで階下に降り、外へ出る！！」

「もたもたしている者は射殺する！」

私達には準備も猶予も無かった。一人が死んでからまだ15分程だ。  
あまりにも、酷い。

「男子1番 秋津 夏樹」

秋津は顔を強張らせた。中性的な顔で女子には人気があった。

バッグを放り投げられよるめく。

秋津は無言で部屋をでた。ただし脚を震わせながら。何人もの女子  
が心配そうに見守った。

「女子1番 哀河 未来」

「男子6番 城内 真彦」

城内は呼んだ士官を睨み据える。

「…早くしろ！」

「俺は絶対に行かない…！」

惣定の目が鋭くなる。

「貴様…！」

銃を抜きかけた士官を惣定が制する。

「……城内君…？」

「俺は絶対に嫌だ…！」

鋭い目は一切緩まない。

「……死にたいですか…？」

「俺は死なない…！」

「なら優勝して下さい」

空気が張り詰めていく。

「やめて！」

女子20番 森川 時乃が止めに入る。數毅の死体が目に飛び込む。

「そうですね…時乃さんの言う通りです…早くバッグを受け取って下さい」

城内はゆっくりと歩きだす。ただその方向は惣定へ。

惣定の前で停まる。

「何…！」

速かった。首を掴んで瞬時に後ろに付いて首に手を回す。

腕で首を締め上げる。

「…撃てるか…？オッサンに当たるぜ…！」

九条は冷静に見ていた。ただ『馬鹿か』としか思わなかったが、同時に危惧もしていた。

BRが中止など有り得ないが、万が一…

「………！！ふ…ふふ…！まさかね…初めてです、生徒が…」

兵士が一斉に銃を向けた。皆が色めき立つ。

「手を上げるなんて…」

惣定はポケットから細長いリモコンをだす。非常に小さい手の平に

入る大きさ。

「とんだヒネガキだ!!!」

惣定がボタンを押した。そして思いっきり肘打ちをかける。

「ぐあ……!!!」

その時には城内の首輪が点滅していた。

首元のアラーム音は城内を焦らせる。

「おい……何なんだよ!!!おい!」

『インパール7号』

今回から正式採用される新型の首輪だ。

小型軽量化され、爆発力も格段に向上した。

その悪魔の枷が今放たれるのだ

「おい!止めるよ!!!死にたくねえ!!!」

「君は馬鹿でした……だから優勝しろと言ったのに………」

「……ふ……ふざけんなあああああ!!!!!!」

城内は一気に駆け出した。呼応するように首輪の警告音が速くなる。最期に一度長いアラームが聞こえた。

城内の喉が白い光に眩しく輝き、そして瞬時に紅い鮮血が飛び散った。

部屋中に響く轟音。皆の悲鳴すら聞こえない。

喉からは血の噴水が上がり、惣定に雨を降らせた。

首輪が一度断末魔の歪んだ警告音を発し、城内は倒れ伏した。ほぼ即死だったようだ。

「真彦お!!!」

森川が駆け寄る。

いくら揺すつても城内 真彦は動かなかった。

首元から血が溢れ、血溜まりが出来ていく。

「真彦……!真彦お………」



森川と城内は付き合っていた。

去年から知られていた仲で、知らない者は居ない。

兵士が森川に銃を向けた。取り巻きの女子が森川を退かせる。

「…はい、他に死にたい人は？」

誰も声を出せなかった。

二つの死体を前に、私達は目の前にいる死に黙るしかなかった。

男子6番 城内 真彦 死亡 【残り40人】

## ゲーム開始

それから私達は順調に外に掃き出された。二つの死体を避けるように、皆出て行った。

女子18番の私、三島 美雪も。

ただ一人、九条は死体を睨んでから出て行った。意味は分からなかった。

教室からはエレベーターで下まで降りた。ビルはエリアの北西。隅っこに配置されていた。

全員が出発してから10分程でこの辺りは禁止エリアになるそうだが、遠くに幾つかのビルが見えた。これだけの範囲とビル群を貸し切るとは、税金の無駄遣いだ。「これからどうしよう……」

まず仲間？それとも隠れ家の確保？

「解んないよ………」

寒い。心細いし、何より怖い。クラスメイトが殺し合いなんてしないと信じてる。信じたい。

しかしその期待はいきなり破られた。

割と近く。連続した銃声が響いた。

「……嘘………」

男子10番 志摩 則正はマシンガンの応酬から逃げていた。誰かは分からなかったが、マシンガンは多分ウージー9ミリサブマシンガンのもようだった。

暗い、街灯だけが点いた道から裏路地に入る。さっき出たばかりのビルがまた見えた。

今何人出発した！？

禁止エリア認定まであといくばくも無いはずだ。

真横のパイプが弾ける。

「しつこい！」

暗い路地はマズルフラッシュで照らされる。

不思議と当たらないものだ。反動が強いのか弾は頭上を擦過していく。

「誰だよ…！一体！？」

それは目の前に現れた人影のことでもあった。

「志摩！？」

私は声をあげた。志摩が何か叫んだが、激しい銃声で聞こえない。断続的な銃声と足音が近づく。

ゴツイスタイルのマシンガンを持った男が電灯のもとに見えた。

「…九条…？」

男子7番 九条 宰

彼は険しい、憎しみに満ちた表情でマシンガンを構える。

九条は何か言おうと口を僅かに開いた。しかし唇をきつく結ぶと、引き金を、今度は容赦無く引いた。

「三島！逃げる…！！！」

志摩は銃声と同時に叫んだ。二人に続いて九条も走り出す。

幾分暗かったが、車もほとんど無いので見晴らしは良い。つまり狙われる。それに路地に入ってもすぐに追い付かれる。

さつきから同じ辺りをグルグル逃げている。志摩はとっくに見失った。でも近い。

九条は両方を、あるいは出会った全ての人間を殺そうとしている。下手に動けない。

今何時？禁止エリア認定まで何分？私が出発したら残りは6人とすれば、

「もう時間無いじゃない！」

女子21番 山野 小雪は度重なる銃声を聞きながら走り去った

「ヤバイ……ヤバイよ……時間が無いし、九条はとち狂ってるし……」  
何かが落ちる音がした。空の、空洞のある何か。

そして鉄の小気味良い効果音。……マガジン！

「近……！」

走り出す。背中に構える音を聞きながら。フラッシュ、銃声、そして激痛が同時に来た。

背中に何発かの弾丸を受け、志摩は倒れた。顔をぶつけたがそれより背後。

動いてもそうしなくても痛い。血が服を濡らしていた。

九条は確実に足音を大きくさせる。

志摩は一か八か駆け出した。

さっきのビルが見えた。禁止エリア認定はもうすぐ。

ならここに居れば死ぬ。

城内のように。

走った距離自体はそう無いはず。ここは確実に禁止エリア。

志摩は路地から出た。

マシンガンが遠くに聞こえる。跳弾も離れている。

九条は……見えない。

ひよっとしたら三島が殺されたかもしれない。大丈夫、俺が殺さない。

三島には悪いが、このままなら九条も禁止エリアで首が吹っ飛ぶ。

周りを見渡す。建物でビルは見えない。離れてビルの方角を確認するのは面倒だった。だって絶対に間違いは無い。

背中が痛手だが、我慢出来ないわけじゃない。

まだ何も失っていない。

俺は、勝った。

逃げ切った。



美雪はいち早く禁止エリアから逃げ、住宅街に入った。もの静かな住宅街。異常な恐怖感がある。はつきり言って隠れる場所なら沢山ある。ビルの出入りは解らないが、家くらいなら簡単に入れる。

だけど他に隠れている仲間が見付かるかどうか……

女子19番の陸奥 幸は親友だったけど、九条との遭遇で会えなくなった。

志摩はどうしただろう……

爆発が一度聞こえた。志摩か、九条か。

どちらでもあつてほしくは無かった。

女子3番 加畑 美弥は北東のビルに来了。幾つかの高層ビルは封鎖されていたが、六階建ての雑居ビルに逃げ込んだ。

明かりは点かない。幽霊だの暗闇が大の苦手の美弥は出来るだけ街灯が窓に近い部屋を選んだ。

ショートヘアを揺らし、窓に愛くるしいと言われる顔を映す。背はあまり高くない。

机や椅子が綺麗に列んでいた。多分何かのオフィスだ。

「よかった……誰も居ない……」 試しに声に出して言ったら部屋に静かに響いた。

窓から外を見てみる。さつき銃声と轟音が遠くに聞こえて、更に悲鳴もしたが、今は静かだ。

「……どうなるのかな……」

地図を見たら、周囲は大体7キロくらい。以外と狭い。ここに来る可能性は十分にある。

「でも他にも建物あるし……」

そう言ったとき、窓から望む交差点に人影が見える。暗いけどすぐに分かる。

肩まで伸ばしたストレート。ミニスカートに、遠くからでも目立つ胸。

女子13番 名律 倉子だ。

クラス1の不良。つねに5番の朽木 紀香や12番 七山 優香を引き連れ、カツアゲ・オヤジ狩り・援交を常習しているロクデナシ。

「…!どうしよう……………!」

しかしここは4階。気付くだろうか。

だが望みもはかなく倉子はこちらに来る。ヤバイ…来た。「あれ…?」

倉子は不安げな表情をしている。恐怖に身を震わせ、おどおどしていた。

倉子は美弥のいるビルに入る。

「……………怖がつてる……………?」

まさか。しかし、いくら不良でも殺し合いが出来るだろうか? ならなんで二人を引き連れていないの?

足音がした。階段を上って来る。

「…来た!」

美弥は反射的に机に隠れた。部屋を探せば遅かれ早かれここに来る。来たかどうか? 決まってる。

もし殺されるなら先に殺してやる。

バッグからベレッタM92Fを取り出す。1キロくらいの重さがある。

説明書は一通り読んだ。後はセーフティを解除して、撃つ。簡単だ。

机の下で息を潜める。まだ音はする。

そのうちに部屋のドアが開いた。下の隙間から見る。短いスカートとスラックとした脚が見えた。間違いない、倉子だ。

眼を凝らして腕を見た。倉子が握るのは…ナイフ!

大きなぎざぎざが付いた危なげなナイフ。アーミーナイフとかいうのだろうか。

間違いない。殺される。

なら、殺してやる。

倉子が向こうを向いた。誰も居ないことを確認している。ナイフは……下がっている。大丈夫。いきなりは殺さない。

銃で脅して、退かせて、逃げる？いや駄目だ。背後から刺される。やっぱり、

「倉子！……！」

机を蹴り飛ばし、一気に立ち上がった。倉子が振り向くと同時にベレッタを向けて、まず一発。

「いやあ！……！」

倉子は真横で弾けた椅子に弱々しい悲鳴を上げる。

でも無駄よ。殺す気なんですよ。

「美弥？美弥でしょ？……待って、撃たないで……！！」

「来ないで！！」

ナイフはこちらを向いている。明かりの範囲に来た倉子が鮮明に見える。

よく見たらナイフも、服も、長袖の腕も、へそが見える腹も、豊満な胸も、血で汚れていた。

「……どういうこと？殺してきたんですよ……二人とも殺したんですよ……！」

「違うわ！私、紀香や優香に襲われて……何か、分かんないうちに……皆……！」

「嘘言わないで！」

もう一発撃つ。今度は脚。当たらなかつたけど、床が砕ける。

倉子は涙を流しながら訴える。ナイフを取り落とした。

まだよ、信じない。何か隠してる。二人から武器を奪ったはず。

「……来ないで……殺すわよ……この淫乱……！」

「お願い……信じて……っ」

倉子が崩れ落ちる。泣きじゃくりながら苦しげに懇願した。

なんで？殺すつもりならもう何か出してる。銃かナイフか、あるい



は殴れるもの。倉子はおもむろに立ち上がる。ベレッタを握る手に力が入る。

「…信じて、くれないの……？」

俯いたまま呟く。

顔はよく見えない。

「当たり前でしょ……」

倉子の肩は、震えていた。悲しげに、寂しげに。

「私……ずっと悪いことばっかしてて……お金盗んだり、殴ったり……」

「…援交？」

「してないわ！！そんな噂ばかり流れて……皆信じてくれないし……でも、紀香とか……優香好きだし……」

見下す私の前で泣いている倉子。ホントに？援交してない？嘘。何食べたならそんな胸になるのよ。

「でも殺したんでしょ」

「…違うよ……違うって言ってよ……」

「……」

美弥も押し黙るしかない。

ショートヘアの銃構えた女子と泣きじゃくるスタイル抜群美少女。

どつという構図よ。

「顔を…上げて」

倉子は涙を手で押さえ、美弥を見た。

そこだけ見れば純真な美少女だろう。

けど、

「ごめんなさい……貴女のこと……まだ信じきれてない……」

倉子は待って、と言って最後の許しを請う。

「お願い……一人はもう嫌……謝る……今までのこと謝る………ただから……！」

「謝ったってその時間は還ってくるの……！？」

「……ごめん……私……どうしても……駄目……？」

倉子が泣いて、謝る。想像しがたい光景だった。だつてそうでしょ？あんなに酷い人間で、仲間をべらせて、私を苦しめた。

「……………罪よ……まだ……………消えないのよ……まだ忘れられないのよ……………！」

私だけじゃない。名律 倉子に嫌悪や不信を抱く人間はいっぱい居る。

「……………解ってるよ……………全部……………私だよ……………でも……………」

……………怖いよ……………」

倉子が不意に近付いた。その行動に思わず引き金に力を込める。倉子の左肩が押されたように弾かれた。胸がゆっくりと揺れた。倉子の服に真新しい染みが出来ていく。左肩が痛むのか押さえている。足元には小さく水溜まりが出来る。

倉子は悲しげな顔で見つめた。諦めかけたように。

「……………やっ、ぱり……………駄目なの……………？」

なんで？どうしてよ？なんで何もしないの？早く睨んで、罵倒して、馬鹿にして、襲い掛かりなさいよ。なんで、何もしないのよ。

「……………つちやっただじゃないの……………」

「……………え？」

あんなに撃って傷付けた。あんなに睨んで、怒鳴って、見下したのに。なのに、

「……………撃つちやっただじゃないの！……………なんで……………殺さないのよ！……………」

そのとき、倉子は本当に、綺麗に、優しく、微笑んだ。

「……………貴女を……………信じたかった……………」

馬鹿じゃないの？私の為に？信じなかった私を、3発も撃って傷付けた、私を。

「……………貴女……………馬鹿よ……………私を……………」

今度は私が泣いてる。名律 倉子が、信じたかった……………？

「だって……一人で怖くて……貴女しか居なかったから……」  
銃を構える力が抜けていく。銃口が下に下がっていく。

「私……貴女を……ずっと怖がってたよ……？」

「……いいよ……？気にしないよ……？」

涙が止まらない。

倉子が抱き着いて来た。暖かい。胸がちよつと女として悔しいけど。

「……ごめんなさい……」

「……うん……」

左手を倉子に回す。倉子も強く抱きしめる。心地良かった。右手に不粋な銃を握ったままだったけど、そのままにした。

「美弥……」

そのとき一発の銃声が聞こえた。「……」

……え

倉子も私も目を見張る。胸の辺りに新しい温かみを感じる。  
音は、確かに私の。倉子は両腕を私に回している。

だから、

「……」

……私

……？

倉子は苦しげに口から一筋の血を流す。腕が解けていく。

そつだ。私しかいない。倉子を撃てるのは

倉子が横ざまに倒れる。

「倉子……！！」

倉子の右胸には赤い鮮血が。胸が、

「当たったんだよ……だって……指が……倉子……！」

倉子は、怒らなかつた。

「ゴメンね……あたし……のせいだね……美弥は、」

「何言ってるのよ……！お願いよ……生きて……お願い……」

さっきと同じことを、今度は私が言っている。

そうだったんだ。

倉子は悪くない。私と同じだった。殺してしまった自分を必死で言い訳して、一人になるのが怖かった。

悲しかった。

なんで気付いてあげなかったの？

「あたし……美弥、巻き込んだじゃったね……あたしの、胸、きつかったよね……美弥は、悪く……ないよ……？」

いつまで私を信じ続けるの？痛いなら、辛いなら、憎いなら、言いなさいよ。

「……貴女……優し過ぎるよ……私のこと責めてよ……！なんで撃つたんだって、なじりなさいよ……！」

でないと堪えられない。

「……馬鹿……大丈夫……だから……」

辛いのに。悲しいのに。背負えと言っの？貴女を撃つたこと。

「……じゃ……ね……」

……好き……かも、貴女のこと……  
倉子の手が落ちる。胸の上下動が停まった。あの優しい笑顔は静かに目を閉じている。

「……倉子……？……起きて……よ……！」  
死んでいた。

私が殺したんだ。最期まで私を信じて慰めた倉子を、事故とはいえ無慈悲に。

もうあの微笑みが、還らない。

「……いや……倉子お……いやああああああああああああああああああ……」

血で汚れた倉子の唇は、うっすらと笑んでいる。苦しかったはずなのに、馬鹿だよ。

彼女は優しくかった。純粹だった。今までしたこと、全部解っていた。私だけが善人になって倉子を責めた。追い詰めた。

自覚してたんだ。自戒の念があった。ホントに処女だったんだよ。

倉子は。

馬鹿は…私だ。

何度も彼女を疑って、希望を捨てさせた。私は高見に立って、  
なんで信じなかったのよ？

「無理だよ……………私…背負えない……………」

倉子の笑顔を思い出しながら生きるなんて無理だ。

銃を再び握る。

セーフティは解除してある。力の無い腕を上げて、銃口を

こめかみに当てた

女子3番 加畑 美弥

5番 朽木 紀香

12番 七山 優香

13番 名律 倉子

死亡

【残り35人】

## 第一日目（前書き）

かなり間が空きましたが、なんとか結構あっさりしてる展開です。

## 第一日目

06:00 AM

### 第一回定時経過放送

街中に備えられたスピーカーはノイズと共に惣定の声を届けた。

『お早うございます。6時になりましたー。6時間に一回の放送で、死亡者と更新禁止エリアを発表します……』

私が聞いた惣定の声は寝不足気味だった。

私は九条から逃げたあと、住宅街の民家で一晩過ごした。

『…では、死亡者の発表です。死んだ順番です』

『男子11番 瀬藤 數毅。6番 城内 真彦。10番 志摩 則

正。女子5番 朽木 紀香。12番 七山 優香。13番 名律

倉子。3番 加畑 美弥。以上7名！まああのペースですね……』

名律や朽木は不良の代名詞的存在だったのに。なぜ死んだのだろう。  
「それに加畑まで……」

正直加畑とはあまり折りが合わなかった。なにかと高圧的な一面がある。

だが、もう死んでしまった

『禁止エリアの発表です。2時間後、F-1……』

次の放送までに3のエリアが消えるらしい。この住宅街も指定された。

『では次の放送は12時です。それまで頑張って殺し合ってくださいね？』

そのときかなり遠くで銃声が聞こえた。



「おい！やめろ！俺が何したってんだ！！」

銃口に叫んだ声は呆気なく掻き消された。

容赦無くフラッシュに撃たれた男子8番 古宮 慎介は腹を鉛弾で引き裂かれ、赤黒い内臓を破裂させた。

遠退く意識と視界の先で、女子14番 西巻 愛が顔を引き攣らせ、座り込んでいる。

「……げろ……」

大口径のマグナムが再び火を噴く。

胸から鮮血がほとばしる。肺に穴が空いたのか息が苦しい。

「……逃げろ！愛！」

マグナムを構える音。やはり容赦していない。

「ハハッ！逃げろ逃げろお！」

愛が立ち上がる。声の主は男子18番 野坂 藤士朗。

「ハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

高笑い銃声が重なる。愛は逃げ出したが、弾丸は正確に愛をかすめていく。

「……デメエ……！なんで……」

「うるせえ」

後ろ手にもう一発。

「うだうだうるせえよ……馬鹿ちゃんが……」

藤士朗は血にまみれた腹を蹴り飛ばした。慎介が呻く。

「……！！！！！！！！ッ！！！！！！」

「まあ面倒臭えや……死ね」

耳のすぐそばで轟音が響いた。

痛いと思う前に慎介は絶命していた。

「愛ィ……？……？……？……？……？……？……？」

藤士朗はついさつきも殺した女子20番 森川 時乃の死体を見据えた。

「殺すには惜しかったかなあ……？……？……？」

そう言ってから愛を追い掛けた。すぐには殺さない。

追い詰めて追い詰めて、  
「…………どうしよっかなあ……」

男子8番 古宮 慎介

女子20番 森川 時乃 死亡 【残り33人】

女子14番 西巻 愛は住宅街を抜けて、東側の川へ走った。  
古宮は死んだ。一緒に居た森川も頭を撃ち抜かれ即死だった。  
血と硝煙の臭いが甦る。

特に行動を共にしていたわけじゃない。森川と居たところに古宮  
慎介がやってきた。

心強いと言えば確かにそうだが。

「役に立たないんじゃないねえ……」

「!!!?」

野坂だ。

下に向けてマグナムを撃ち放つ。

愛の左足が跳ねる。

「…逃げちゃ駄目だよ……」

倒れ伏す愛の上に野坂が立ちはだかる。

「八八八八八八!!! 八八八八八八八八ッ!!!」

「男子8番死亡。残り33人です」

教室に敷設されたいくつものモニター。それらは常に番号が割り当てられた光点を表示し、生徒を逐一監視している。

「男子20番と21番が外縁フェンスに接近」

士官は慌ててコンピュータを操作し、ヘッドホンに集中した。

「……間違いありません…フェンスを破ろうとしています!!」  
教師惣定は向き直った。たった今8番の死亡確認を書類に明記したばかりだった。

「首輪を作動させますか？」

「……………いや、待て」

男子20番 三島 敏郎、21番 矢文 琢磨は南南東のフェンスを破壊しようとしていた。

「フェンスの一部分だけでも破壊すれば、ひよっとしたらゲームは中止になるかもしれない」

近くにあった軽トラックを見たとき、思わず歓喜しそうだった。キーはすぐ前の家で予備を見付けた。

ガソリンの針はFを指している。

上手くぶち破ればそのまま逃亡できる。

「そんなに上手くいくかな…」

矢文は不安げだ。

「大丈夫……………多分……………」

「そんな上手くいくわけないだろうに……………」

中年の士官は鼻で笑った。明らかに嘲笑している。

「先生。思い知らせましょう……………!!」

惣定は士官を見ずに、

「……………今やれば、首輪の盗聴が知られる可能性もあります……………」

「しかし、あそこには誰も……………」

中年士官は言いながらモニターを一瞥し、気付く。近くにもう二人居る。

男子18番 野坂 藤士朗と女子14番 西巻 愛。

「まずいですね、何かと」

「ハハハハッ！もつと逃げろよ！愉しませろ！！」  
「いやっ！来ないで！！」

野坂は愛を執拗に追い回していた。愛の左足はもう役に立たない。捕まえては振りほどき、押し倒してはもがきを繰り返した。何度目か、押し倒したとき、エンジン音が聞こえた。

「誰だ…？」

愛は目一杯叫んだ。

「助けてえー！！！！！！」

「てめえっうるせえ！！」

のしかかった体勢で腹を殴る。愛が苦しげにもがいた。

「ハハッ…ハハハ…可愛いじゃねえか…！愉しませろお！！」

「

不意にエンジン音が近くなった。やけに大きい。

力を抜いた瞬間、愛が野坂を横に投げた。

不様に転がっていくのと、

「っ…てえなあ…！なに

」

野坂の頭蓋骨を軽トラックのボンネットが砕いたのはほぼ同時だった。

「野坂死亡！」

教室がどよめいた。

「首輪は必要ないな…」

「あ…あ…あ…」

愛が目を開けた先には、頭の原因を留めていない野坂 藤士朗の死体があった。

男子18番 野坂 藤士朗 死亡 【残り32人】

12:00 第二回定時経過放送

野坂が死んだあと更に二人、自殺したらしい。

男子1番 秋津 夏樹と女子15番 根尾 早紀。

詳しいことは教えられなかった。

定時経過放送は再び禁止エリアが3つ増えることを知らせて終わった。

心なしか惣定の後ろの声は焦っていた。微妙に慌ただしい部屋で話しているような感じ。

もちろん詳しいことは解らなかった。

男子1番 秋津 夏樹

女子15番 根尾 早紀 死亡 【残り30人】

## 第一日目（後書き）

結構死ぬペースが速いですね。後半で一気に死ぬのも合わせると相  
当なペースです。

ラスト辺りでは三島と九条の対決が。

お楽しみに…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5342f/>

---

BATTLE ROYALE The Third Battle

2010年10月15日20時31分発行